

辰年に因める龍の字

後 藤 朝 太 郎

三千年、五千年と云ふ昔のことは、何だつてよくは判らぬ。埃及や、アッシリヤ、バビロン、乃至はスメルやアッカドの刻文からする當時の文化は、大分判つたと云はれてゐる。又その時代に相當する支那の文化も、四書五經を信する學者から見れば、これまた明になつてゐる如く考へられてゐる。けれどもドグマは暫く避けて、冷靜に考へて來るときは、その當時出來た鐘鼎彝器の古銅器ブロンズ類には、最近支那よりも日本で、兵庫縣住吉の住友男爵家から立派な泉泉清賞の續篇の公にされてゐるものがあるが、かう云つた金石文字によつて、當時の文化を楷書などに翻譯することをせず、もとのまゝで調べることが出來れば、それで何よりたしかな結果が得られるわけである。本當に3000年前のテキストを眼前におき、手で觸つてしらべられると云ふのであるから、これほど確かなことはない。但し偽物や眉唾ものは別として考へなくてはならぬことは云ふ迄もない。

それから尙一つは、龜甲文字と云つて河南省の彰德方面から、あの通りたくさん出てゐた龜卜用の龜甲斷片であるが、之には3000年以上、もつと古い時代の文字と思はるゝ繪文字そつくりのものが數多見出され、そしてそれが大半今日では金石文字と比較研究をやつたので、いくらでも讀めるやうになり、牽いては支那の有史以前の古代文化の一斑を推することも出来るやうになつた。實に有りがたい材料が出たものである。殷の時代の都の墟と云ふから、それであるとしておいて差支ないが、ともかくもすべて元始形式の文字のみである。象にしても、虎にしても、家屋にしても、食器にしても、實際繪そのまゝのものである。かゝる材料を取扱つてゐると、浮世離れのした心持ちになる。古代のことを研究するのに、1500年も2000年もの後の字形で推して行くやうなことをするぐらゐ危ぶないことはないと云ふことも判つて來る。のみならず、第一後世の字形ではさつぱり物が判りもせず、見當もつかぬのである。

速い話が本年の辰年の辰の字に就いて考へて見ても、どう云ふわけで此の辰の字がかゝる構造組織を取るに至つたのであるか。もとは何の形に始まつて出來たものであるか。そこらは少しも楷書では判らぬ。篆隸楷行草何れにしてもよく判らぬ。ところが、そこになると例の龜甲文字に遡る。すると、どうやら、それが初め動物から出てゐた所まではわかる。と云ふのは、その初めの形は(1)のやうに書かれてゐる。

これがいかなる動物であるか判らぬが、他の多くの文字から推して考へると

動物たること丈は明である。もし之を“曉天に兩手で捕へる”との意味に出来てゐる文字を捜してると、それは即ち晨の字で、こは臼(兩手)と辰とから成立つてゐるのである。つまりその元始形式の本來のところは(2)の通りである。



(1) 辰の字の最古の形

(2) 辰の字の古形

説文には辰は“農の時なり”とあるが、早朝この動物を捕へるとか、せわをするとか、兎も角之に關係のあることをすることから晨と云ふ字が出来たものらしい。しかし之に田獵の田(畋)の字を加へて、田と兩手と辰とで以つて農の字の古形をなしてゐるに思ひ比べて見るときは、矢張りこの狩獵そのものを此の農の字で表現してゐるやうにも考へられる。果して然りとせば、今日の農の字の如きも、そのもとは矢張り動物を狩りするとの義から出来てゐたのが抑も本來の構造であつたのを、後に改めて耕農の方の意味に變へたものと見られる。元來ならば動物に因んで出来てゐる字であるから、こは狩の方に用ふべきものであるに、いつしか、アグリカルチュアの方の意義になつてしまつた。これは一般社會が變つて行くのだから訴へて行く處もない。丁度かねて税を納むる時代になつて來てゐる今日、矢張り昔、禾稻を納めてゐた時代の文字の通りに、租の字や税の字などを用ひ、又貝そのものは之をみつぎとして納める場合に用ひられてゐなくつても、矢張り貢ぎには貢の字を用ひてゐる。この租だの税だの貢だのと云ふのも、文字上から理窟を云へば、随分變なものと云へる。

もつと變なのを求め出して見るとすると、先づ第一に花嫁花婿の婿の字を擧げねばならぬ。婿は女に非ず、男子である。男子であるに女扇を取ることになつてゐる。これと云ふのも元來は士(サムラヒ)と胥の二字の合體であつたのであるが、いつしか花嫁の嫁に引かれ、男の士が女性化してしまつたのである。實に女装した男みたやうなわけであるが、これも致方がない。社會の方にかやうに變化させる丈の力を有つてゐるが爲め、個人としてよし頑張つて見ても仕方がないのである。

さて辰に因みて今龍の方の字形に就いて見るに、こは元來辰に關係があるかと云ふと殆どない。全くない。龍は龍である。龍の本体がいかなるものであるか、本當のところは判らぬのである。けれども、もとはこれ亦動物らしく考へられるのである。南支の廣東方面にゐる蛇の一種の天龍と云ふものが即ちこの龍のもとをなしてゐるやうに思はれる。實物の生きたものを現場に行つて見る

と、その胴體の形と云ひ、又その動く様子と云ひ、丸で蛇である。たゞ四肢を有つてゐて昔の畫に見る龍と少しも變らぬ形をし、蛇にして足があるのである。蛇足と云ふと餘計なものと云ふ意味に考へられてゐるが、事實なくてもよい足だと思はれる位、細いかよわい形をしてゐる。つまり蜥蜴と蛇との中間をなすものとしてのカテゴリを立てておけばよろしからう。それにしてもその龍と云へる文字そのものは、どうしてかゝるむづかしい形を取つてゐるのであるか。その龍の字の元始形式と廣東との間には判つきりした脈絡があるとは思はれない。しからば龍の字の古形はどうかと云ふと、太古の形は河南出土の龜甲文や古銅器の吉金文共に單簡なものである。龜甲文の上では特にこの龍の字は度々出て來るのである。即ち、



(3) 龜甲文に見えた龍の字の元始形



(4) 龔の家の元始形

多くはかうして口を開いてゐる形に見えるのであるが、時には口を開かないものもある、龍の字を含む龔の字なども、殷代の文字中にはよく見出すのであるが、その龍の字の形のところは同じことである。鐘鼎文の方で之を見ると、頭上には或るしるしを有し、首と胴體は細長く出來てゐる。この點はいくつ集めて見ても、何れも同じことである。そして説文には之を蟲類なりとなし、説明して曰く、「こは鱗蟲之長なり、能く幽に、能く明に、能く細に、能く巨に、能く短に、能く長に、春分にして天に登り、秋分にして淵に潛む、云々」とあり、そして首上のしるしは童の字の省きであると云つてゐるからして、つまり龍の字の音符として、意味に關係なく唯符牒としてついたもの、その lung と tung とは別音にちがひはないが、その古語の方から云つて lung も隆る、tung も登る、と云ふ義になり、隆・登共によくその龍と云へる動物の特性を示したものと見られる。それ故同一語として之を見てよろしいわけである。現に龍の字に於ける龍は、最も有力にその tung の音たることを證明してゐるのである。



(5) 古銅器に見る龍の字の元始形

龍は支那古來の民俗の上に、又、歴史、文學の上に最も重きをなせる靈的動物であるとせられてをる。こは靈鹿や神羊以上に考へられてゐるらしく、又周易の易（トカゲ、蜥蜴）以上にも見られてゐるやうである。之が圖案化せられ

ては天子の十二章の一つに用ひられ、又歴朝常にその靈龍の出現を以つて瑞祥の極致とされてゐるのを以て見ても、その氣分はよく判るのである。本來の辰年の辰は、之が動物であるにしても、そのえたいがよく知れぬ。がしかし龍の方は比較的よく判つて來たやうな氣持がするのである。尙これ以上少しく北支那に逗留してゐて、北京あたりの龍燈、その他龍に因んだ催しものに就いても、出来るだけ注意を拂ひ、龍の文化の支那民族の趣味嗜好と云つた方面のことを面白くしらべて見たと思つてゐる。

顧てみると今から24年前、民國5年（辰年）のことである。自分は拓川加藤恒忠翁と北京に暫く客となつてゐた。時宛も袁世凱が北京の空に龍の雲の現はれ、又湖北宜昌の峽中洞窟内に大きな龍骨の現はれたと云ふので大騒ぎとなつた。たしかに瑞祥と云へば即ち瑞祥を得たわけである。袁大人はそこで洪憲の年號に改めんとして之を假定したり、同時に自ら皇帝たらんとしてすつかりお目出度くなり、その準備にとて即位式を舉ぐる爲めの高御座だの、即位の衣冠束帶だのと云ふものを滞りなく萬端拵へたのであつたが、列國から承認を拒んで來たので、すつかり當てが外れ、オジャンになつてしまつたのもその時であつた。そしてその年の五月であつたか、六月であつたか、孟夏の頃、光緒帝の大喪と西太后の喪と、それにつづいて袁大人も他界してしまつたと云ふ幕になつたのであつた。又、民國17年の辰の年春王正月を北京で迎へると云ふに當り、こゝに國都に似合はしい龍のことを聊か述べ、併せて支那文化の研究に興味を持たらし、各方面の士君子にかくの如き超政治、超財政、超關稅問題と云つた吞氣なところに、無限の分野の殘されてゐることを注意したいのである。北京で久しぶり正月をし、龍の字考の持合せを述べて、中華民國並に日本その他諸外國にゐらるゝ江湖の士への辭といたしたいのである。

來る十月16日は半影月食

來る十月16日は、皆既日食より半ヶ月後に當り、月が地球の半影月食となる。今1940年のやうに、一回も月食らしい月食が無い年にも、“半影月食 Penumbral Lunar Eclipse”は起るのである。（急報398號参照）即ち、四月22日と十月16日とである。しかし、普通に肉眼で見ただけでは此の種の月食は全く見分けが付かないので、觀測は實際上ダメである。只、寫眞術を非常に巧みに使ひこなす人があれば、多少の收穫は得られるだらう。

川崎博士夫人逝去

水澤緯度觀測所技師川崎俊一博士夫人は去る八月26日急病にて逝去。同28日の葬儀には木村、山本兩博士、其の他多數參列した。（急報 439）